OSAKA MUSEUM OF HISTORY
大阪歴友
Vol.21
2011.DECEMBER
大阪歴史博物館　友の会だより　No.21

大阪歴史博物館開館10周年によせて

大阪歴史博物館　館長　脇田　修

現在の博物館は多くの方々によって支えられているが、大阪歴史博物館も同様である。ここでボランティアの方々に対して、まず感謝の気持ちを申し上げておきたい。

そこから出発して、私は大阪という町と文化が、多くの人々の手で作りあげられたことを、もっと宣伝すべきだと思っている。大阪中之島の中央公会堂は寄贈者の岩本栄之助氏であることは広く知られているが、春翠住友吉左衛門氏も美術館として茶臼山邸を寄付されて庭園の慶沢園は今も残っているし、大阪府立図書館の建設にもかなりの寄与をされて同家の蔵書類なども寄贈されている。大阪の公共施設には同様の例が多いのである。私共の博物館のとなりの大阪城や戦後しばらく歴史博物館であった城内の元師団司令部の建物も市民の募財によってできているが、もちろん私共の博物館にも多くの寄付を頂いている。

また幼稚園・小学校では、愛珠幼稚園のヴァイオリン・ストラディヴァリウスや愛日文庫は知られているが、他の学校にも地元の方からの援助が多かった。私なども曽根崎小学校の在学時に土俵が造られ、土俵開きがあったが、このとき当時六九連勝中の名横綱双葉山の土俵入を見せてもらったことは、今も明らかに覚えている。こうした市民の貢献された事例をこれからは調べて、できるだけとりあげて残し、顕彰したいと思っている。

少し話は違うが、歴史博物館から大阪城を望むと、手前に教育塔が見えて、これがどのような建物か聞かれることが多い。これは戦前の室戸台風に際して校舎が倒れた際、児童をかばって殉職された吉岡訓導を顕彰したのが最初で、以後、教育関係者の遺風を讃える施設となっているが、私は小学校で先生の話を伺った。時も流れて、近年では言われなくなったが、こうした大阪の町での美事をもっととりあげたい。それが歴史博物館の使命の一つと思っている。

教育塔壁面浮彫彫刻

友の会の運営に感謝と今後の変革を

友の会会長　戸田　健治

大阪歴史博物館10周年をお祝い申し上げます。

友の会の行事には館長様はじめ学芸員の先生方に色々ご指導頂きまして多彩な催しを行うことが出来感謝のほか御座いません。歴代友の会の事務局の先生の一方ならぬご尽力により、到底個人では体験できる事の無い物を得られたのも友の会会員としての特権だと思います。私自身も数々の体験や見聞を広めることが出来有難くお礼申し上げます。

友の会の会員皆様も最近には多数ご参加頂き、時には少々過酷なまでの動きをお願いした事もありました。この期間の皆様方との楽しい思い出が走馬灯のように浮かんで参ります。一番心配したのは犬山城の茶室の国宝建造物を足元が悪く滑って入り口の戸を少し傷めた時、事務局の先生と真っ青になった事。

又、よい企画には多数の会員の申し込みがあり定員の関係で公正な抽選とはいえ、選に漏れ参加できない会員には幹事として申し訳なく心痛の思いでした。多少の事故も有りましたが会員の皆様が無事だった事が何よりでした。

開館10周年を機に最近の社会情勢の変化に合わせて博物館の運営も一段と厳しいものになります。友の会の運営も博物館に今までと変えて如何に館の役に立つ体制に変えて人心を一新する必要に迫られて参る事と思います。

皆様のご意見ご協力を御待ち致します。

会員の声（五十音順）

大阪歴史博物館が好きになったこと

新井　皓之

「歴博」10周年おめでとうございます。会報「歴友」が10周年記念号発刊しますこと、友の会員にとって喜ばしいことです。「歴博」と私を述べたくて筆を取りました。私は会社生活を終えると、ある方の推薦をいただき、大阪家庭裁判所の調停委員となりました。調停委員には相互研鑽のため「大阪家事調停協会」があり、諸活動を行っています。そのひとつに「会報」の発行があり、平成13年会報委員となりました。「会報」は主として会員相互の交流、啓発であり、外部のことは少ないのであります。若さ?のためか、前例破り中央4ページを（新「向こう三軒両隣り」のご紹介）として訪問記事、写真、MAPを入れました。そのひとつが平成13年11月3日オープンの「歴博」でした。取材のためオープン前の忙しさのなかにもかかわらず親切にご案内いただいたことが今も忘れられないことでした。オープン後まさにお隣りであり、早速、友の会に入会し“歴博”ライフを楽しんでおるわけです。

友の会では「会報No.15」にて“西国街道を歩く第6回豊川～高槻”を書かせていただきました。これからも友の会にて“歩くこと、見ること、聞くことそして話すこと大好き”を満喫しようと思います。

三内丸山遺跡見学

一丸　忠邦

友の会に入会して初めて参加した行事が特別展に因んだ「三内丸山遺跡見学」だった。

以前から一度は行ってみたいと思っていたのですぐ申し込んだ。梅雨前の初夏の陽射しの中、三内丸山遺跡をはじめ是川遺跡、大湯環状列石、亀ヶ岡遺跡等をバスで見学した。

縄文時代にタイムスリップしたかのようで例の六本柱は家族でも何に使われたか議論になったものだ。岡田康博氏の案内で「むら」の佇まいを思いめぐらすことができた。「歴友」にもこの時の感想を載せていただいた。

幹事、会員の皆様、学芸員の方々とも話ができ、今でも思い出深いものとなっている。

気楽、三楽、極楽をモットー（motto-）にして　三楽（1）家族の健康、（2）恥じない行動、（3）後進の育成

井上　尊重

私は大正14年丑年生れの86才です。“ボケ”ないで日常の生活が怠りなく出来る様、屋外行事には極力参加させてもらって居ります。先日も熊野街道見学会で住吉万代池公園より大和川まで19,450（イクヨゴウ）歩完歩致しました。何時もの事乍ら役員の方々はじめ参加された皆様に親切にして頂き感謝致しております。ありがとうございました。

近代大坂の漁業

今井　章夫

平成22年11月に八木滋氏の標記のご講義を4階講堂で拝聴した。

市街化していて、今では想像も出来ない漁師村が大阪湾沿いに連なり、徳川家康の時代にすでに「綱引き」を認める「御証文」を頂いた例（佃村）を教えて頂き、本当にびっくりした。

海に注ぐ川口では、鯉・鮒・鯰をはじめ、蜆に至るまで多種で豊富な漁獲があったと知りまたびっくり。

一方、多くの水難事故もあったようで、水死者名簿には15歳・16歳の少年も散見され、改めて哀悼の意を抱いたのであった。

歴博と友の会の印象

奥田幸治郎

千日前の古い資料を大阪歴史博物館に寄贈しましたのを機会に友の会に入会しました。

歴博には以前にも見学に行った記憶がありますが、入会してからは常設展、特別展とよく出かけています。あらためて歴博を見直しています。学芸員の先生が、企画を考え展示を更新されており感心しています。

友の会の行事の花外楼の見学では、歴史的なものがあり印象に残っています。一度入ってみたかった所ですので楽しめました。

河内ワインと古道を歩く企画も周辺のことがよくわかり天気にも恵まれよかったです。ずい分と歩いたと感じました。

歴博も友の会も充実した企画で楽しめるものになっていくことを望んでいます。

歴博開館１０周年の思い出

末廣　　訂

大阪歴史博物館が開館10周年を迎えられお祝い申し上げます。

開館後しばらくして歴友会の募集があり、すぐに申し込みをした思い出があり、あれからもう10年が経つのかと驚いています。

いろんな催しや行事を計画していただき、参加した中で特に思い出に残るものをあげると、西国街道を歩くシリーズ、吉備路を1泊とまりでバス旅行、また「稲村の火」で有名な濱口梧陵の生誕地、広川町や湯浅町の訪問、そして、福島区を訪問していただき、地元福島区歴史研究会で野田藤から蜆川、堂島川に沿って名所、旧跡をご案内したことがあげられます。

いつもお世話になっている友の会の幹事さん、学芸員の先生に心よりお礼申し上げます。

大阪の代表的な施設をより身近に感じられる友の会行事

竹中　裕昭

大阪歴史博物館開館10周年、おめでとうございます。

私が参加させていただいたのは、普段、中に入る機会がめったにない施設の見学です。

大阪地裁では、初めて裁判を傍聴しました。大阪府警本部では、110番通報を受けるところを見ました。また、日銀大阪支店で破損したお札を交換できることを知り、後日、交換してもらいました。

このように大阪の代表的な施設を身近に感じ、暮らしに役立つ情報をいただくことで、ますます大阪が好きになり、暮らしやすくなるのが友の会行事の魅力の一つです。

今後のますますのご盛会をお祈り致します。

見学会は財産に

長村　常弘

友の会活動の、いつも楽しく有意義な時間と空間に感謝しています。大和郡山城下の史跡めぐりと全員での昼食会や、今年の道修町の「荒川歴史館」では明治期の店の棚卸勘定帳や当主の卒業證を、少彦名神社の「くすりの道修町資料館」では薬種問屋の先人たちの業種を、重文の「旧小西家」では船場の家屋の粋の極みの座敷を見学しましたが、これらの見学会は自分にとっての掛替えのない財産になっています。

友の会の楽しさ

不室　文人

私は入会して2年目で、10周年の節目にその記念を語る資格はありませんが、何度かの活動に参加し、今は入会してよかったと思っております。バスツアー、旧街道・街中歩き、博物館特別展鑑賞、芸能鑑賞、裁判所見学など趣向をこらした多種多様の活動があり、歴博の先生の詳しい解説もあり、古代から現代までの長い時間の中での“いろいろな物事の歴史”を楽しめます。これからも歴博の先生、幹事の皆様にお世話になりますが、楽しい活動をよろしくお願いいたします。

これまでの見学会から

河内ワイン館

湯浅の町並み

旧小西家住宅

館員からひとこと

友の会10周年によせて

豆谷　浩之

友の会10周年おめでとうございます。私が友の会のお手伝いをしていたのは、立ち上げ直後の数年間でした。最初のころは幹事さんも決まっておらず、あまり行事も行えませんでしたが、やがてお世話をして下さる方が集まり始め、気が付いたら年間行事でいっぱいという状態にまでなっていました。学芸員の立場で言うのも何だか変な感じですが、自分の関心では行かないような見学先にご一緒させていただいて、けっこう勉強になりました。（けっこうよく歩いたという記憶もありますが。）よかったらまた声をかけていただければありがたいです。

率直な私の思い

伊藤　　純

友の会事務局を担当した経験と、現在の活動を傍から見ていて、思うところを述べる。

現在の友の会は、博物館と財政的な繋がりのない独立した組織である。一般の年会費3000円のうち一文も博物館の直接の収入にはなっていない。独立した組織にもかかわらず、2人の学芸員が友の会の担当者となり、日常的な会費の管理から、しばしば行われている見学会の引率などに駆り出される。予算削減・コンプライアンスの徹底・普及事業の拡大などなどという大号令の下に、いくつもの仕事を同時進行でこなしている私たちにとっては、財政的に独立組織となっている現状の友の会からの時々の要請に応えることは大きな負担となっている。

個人的には近い将来に友の会組織を博物館の直営の組織にしなければならないと考えている。極端に言えば、国立博物館の友の会のように、3000円の会費を払えば、全ての特別展が見られるといったお得感だけで会員の方が満足できる会でも良いのではなかろうか。

10周年を祝って

大澤　研一

わたしが事務局を担当させていただいた期間で思い出深いのは、歴博で開催された展覧会にちなんで、現地を訪ねる見学旅行を数度実施できたことでした。青森の三内丸山遺跡、山梨の武田信玄の菩提寺恵林寺、鹿児島の篤姫ゆかりの地では地元の方に丁寧な案内をしていただき、展覧会の感動を新たにすることができました。現地の様子を知ると歴史は一層興味深いものになります。歴博の活動とリンクした友の会活動をこれからも続けていただきたいと思います。

思い出深い1年

積山　　洋

岩佐学芸員と私とで、友の会を担当することになったのは昨年度でした。自分が知らないところへ行けるというのは魅力的でした。4月の濱口梧陵と「稲むらの火」に始まり、5月には淡路「おのころ島」、7月は小豆島‥‥3月に長浜・彦根というような調子で、出不精の私にとって、大きな刺激になりました。しかし、いたらぬことも多々ありました。わずか1年でしたが、思いで深い経験をさせていただき、感謝しております。

（事務局担当順）

生活文化・考古美術資料の魅力

天理大学附属天理参考館　学芸員　乾　　誠二

去る6月2日（木）は、はるばる天理大学附属天理参考館にお越しいただきましてありがとうございました。弊館の常設展、そして企画展「東アジアの古代瓦―その起源と源流―」はいかがでしたでしょうか。

弊館は昭和5年、天理大学の前身である天理外国語学校の中に設けられた海外事情参考品室を活動のはじめとしております。これは創設者の天理教二代真柱中山正善が、天理教を海外に広める人材を育てるためには言語の習得だけではなく、現地の風俗・習慣もあわせて学ぶことが必要だと考えたからです。創設以来、弊館では世界各地の生活文化資料（民俗資料）のほか、日本・朝鮮半島・中国・オリエントの考古美術資料など、約30万点にも及ぶ資料を収蔵するに至りました。各地の資料を通して、それぞれの地域に住む人々の生活や歴史を知り、お互いのこころを理解することを目的としているのです。

平成13年に現在の場所に移転、装い新たに再オープンし、昨年には創立80周年を迎えることができました。弊館の魅力はなんと言っても豊富な収蔵資料であり、実物をじっくりご覧いただけることですが、80周年を契機とし来館者により一層ご満足いただけるような趣向を凝らした展示にも取り組んでおります。

また展覧会以外でも、講演会「トーク・サンコーカン」やバリ島のガムラン楽器体験講座などのユニークなワークショップ、音楽を通して文化に触れるミュージアムコンサート「参考館メロディユー」などのイベントも活発に行っております。是非、またのご来館をお待ちしております。

※上記文は、平成23年6月2日に実施された天理参考館の見学後に頂戴したものです。
前号にて掲載を予定しておりましたが、都合により今号での掲載となりました。関係者各位にお詫び申し上げます。

今後の展覧会予定

新春展「古代ガラス ―シルクロードを旅した至宝―」
平成24年1月5日～3月5日

天理大学附属天理参考館ウェブサイト

http://www.sankokan.jp/

天理大学附属天理参考館 問い合わせ先

電話 0743-63-8414

連載「浪花百景」～四ツ橋　中央区南船場・西区新町～

第15回

かって東西に流れる長堀川と南北に流れる西横堀川（両方とも埋立）が交差する地点に上繋橋、下繋橋、吉野家橋、炭屋橋と、まさに「口」の字の十字路に架けられていた4つの橋の愛称が四ツ橋と総称された。江戸時代から景勝地として親しまれ賑わっていました。昭和40年代までは東西、南北に市電が走っていましたが、現在は地下鉄が走っています。長堀通りの中央部には、江戸時代中期の俳人小西来山と上島鬼貫の句碑が建っている。本来の四ツ橋があった場所は、阪神高速道路のくぐるあたりにありました。

文：千倉康由

特別展没後50年 日本民藝館開館75周年 柳 宗悦展 ～暮らしへの眼差し～

柳宗悦は民芸運動を始めた哲学者・思想家です。柳は日本各地で職人の手によって作られ、民衆に用いられているさまざまな工芸品の中に「美」を見出しました。この特別展は柳宗悦没後50年を記念して行うもので、東京、横浜、大阪、鳥取、広島を巡回します。

大阪展では日本民藝館、柳工業デザイン研究会の工芸品など377点を一堂に集めて展観します。展示は、柳宗悦自身が愛用していた眼鏡や硯などの身の回りの品々に始まり、「用の美」に着目するきっかけとなった朝鮮時代の工芸、琉球や台湾の衣装や装身具、そして全国各地を巡って収集した陶磁器・染織・金工・紙などの、さまざまな分野の工芸品をご覧いただけます。この展示を通して、柳宗悦の審美眼や民芸運動の足跡をたどることができます。

- 会期／**平成24年1月7日（土）～2月29日（水）**　●休館日／火曜日
- 開館時間／午前9時30分～午後5時（金曜日は午後8時まで）※入館は閉館の30分前まで
- 会場／大阪歴史博物館　6階　特別展示室
- 主催／大阪歴史博物館、NHK大阪放送局、NHKプラネット近畿、日本民藝館
- 協力／日本民藝協会

木喰仏地蔵菩薩像

染付秋草文面取壺

編集後記

本年度二度目の「歴友」刊行、しかも開館10周年記念号をみなさまのもとにお送り出来たことを喜ばしく思います。今号は、事前に会員のみなさまからの声を募集した結果をすべて掲載しております。そのため通常よりも増ページでの刊行となりました。

10年という年月のなかで、博物館を取り巻く状況も大きく様変わりしてきました。それにともない、友の会と博物館がどのような関係になっていくのかについても検討しなければなりません。会員各位のご理解とご協力を賜りますようお願い申しあげます。（友の会事務局　加藤）

●大阪歴友 Vol.21合併号（大阪歴史博物館　友の会だより No.21）
平成23年12月1日発行
●編集・発行　大阪歴史博物館友の会
〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32